HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社會政策時報特輯「北海道農業」批判
Author(s)	渡邊, 侃
Description	紹介
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 8, 307-310
Issue Date	1940-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10687
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p307-310.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

紹介

社會政策時報特輯「北海道農業」批判

渡邊侃

此の集が一つの全書、座右書乃至教科書を目的とするなれば他の大部な著述例へば北海道史等を要約したものを集めても其の意義はあるし、或は同じ材料を見方を變じて目錄索引の樣なものを作ることもあり得る。又大衆向に興味ある樣に諸材料を解說することも必要である。だが若し眞の學問的乃至實際的貢獻を目指すならば、新しい材料の提供か古い材料によつても新見解の發表でなければならぬ理である。その見解が論理が通つて居なければならぬことは勿論である。

それで書き出された問題の種類別批判をして見やう。荒又氏の「北海道農業の地域的形相」は、地域的形相の具體的叙述には入つて居らず、其序論としての自然要素(氣候及土性)並に植民地的發達經過特に中核と遍僻地、農業の府縣型と北歐型米作と酪農等の交錯の如きが取扱はれて居る。其の取扱方法は同君一流の手確さと巧妙さを持つて居る。之を細叙迄進んで各地農業の描寫まで行かせたらと何人も希望する處である。

私に要求された問題は或はそれであつたかも知れぬ例へば普通作として上川の稻作、十勝の豆作、北見の麥作、特用作として渡島、膽振、後志、上川北部、宗谷、北見(斜里郡)の一部に多い澱粉用馬鈴薯作—之に就ては大農經營として細叙を試みた—北見(紋別郡、常呂郡、網走郡)に多い薄荷作、膽振、後志、上川等に多い除蟲菊作、北海道廳が最も力を入れて居る甜菜作、軍需產業として重要な亞麻作等に就てもつと述ぶべきであつた。併し之を技術論にまで立入り詳論すれば一卷も足らぬであらう。それで興味本位に北海道に注文される樣な大經營を例を擧げて描いて見、其の發生存續消滅の條件の樣なものを論じて見たのである。單一耕作、傭人經營を其の特徵として擧げた。評するものは大農を何故奬勵せぬかと云ふであらう。併し單作よりは輪作、一種經營よりは多種經營—例へば主穀農よりは畜產を加味した農業、機械耕作よりは役畜耕作、傭人農業よりは家族勞働農業が奬められるであらう。唯其時々の狀勢に應じて起る大農を剩減せよと

も云はぬし奬勵する必要も認めぬ。唯求めらるれば指導する放任主義なだけである。伊藤俊夫氏の「北海道酪農經濟論の一節」は荒又君の扱方に比するとかなり曖昧さがあつて結論も判明せぬ。例へば北海道を以てヨーロッパやアメリカとは稍々趣が異つては居るが美しい「綠の牧場」にしたいと云ふらしく、酪農が、資本制生産方法から非資本家的勞作經營に移行せざるを得なかつたことは政策の爲めと見る如くであり、又新舊地帶の交替がいつまで行はれそれの影響としての各地帶の農業經營形態の變化が如何になるかは「興味のつきない現象」としてしか扱はれて居ない。出納陽一氏の「北海道の酪農と酪聯の事業」は其の點に於てはハツキリした考へと表現とを持つて居るがかなり宣傳的となつたのは免かれぬ處である。私をして評せしめよ。酪農は決して計算上有利でない、乳牛を飼ふものは朝夙く起き夜晩く寢て年中一日も休まずに働かねばならぬ、而もそれだから勤勉力行し土地を肥やし人間を養ふと云ふ。都市附近の飲用乳生産者は普通の農乳即ち製造原料乳生産者よりは利益があり、且屢々都市膨脹による土地値上りの利益を得て居る、又牧場を經營し種畜を生産するものは種畜が高價になる際優良種畜を有することによる獨占的な利益を得て居る、此等の人々が牛の利益を宣傳して多數者に牛を飼はす樣にせぬでもなからう。製造業者が原料獲得の爲め少數の大農場よりは多數の小農に乳牛を飼はしむると同一の遣方である。私は一概に斯かるものだと斷定するのではないが、其の樣にならぬ親切を要求するものである。例へば勞力不足する場合に乳牛を預托する制度等を立てゝ置く必要があるではあるまいか。乳牛の移出禁止で乳牛保持を確保する消極策をとつたが老牛幼牛にまで及ぼす必要はないことである、唯壯牛は其の樣な方法で確保すべきであらう。

北海道の歷史を見、其一事象を執へて批判する場合に、それがよい面もあるし惡い面も持つて居ることを閑却してはならぬ。或は少くもさう云ひ得ることである。例へば屯田兵制度一つとつて見ても、恐く其の事業に多額の費用を費したこと兵事の爲めに農事を犧牲にした密居制度等は惡い點であつて、植民特に農事に貢献がどれ程あつたかを私は疑ふが、兎に角多くの人を入れ其の內から二代目等に多數の小學校教師を出したり中に北海道を指導する樣な人物が出たりして居ることを思へば、其一般的貢献は疑なき事實である。

地主制度にしても、それによつて現在の小作割合の多きこと、之が整理に自作農創設、民有未墾地開發事

業が行はれて居ることを考へると思はしくないが、尙地主が自力で小作人を移し其の指導保護に任じたことを考ふれば、それなしには北海道は斯く速に開發されなかつたらうと思はせられる。彼の國土を外人に委ねた開拓使の一大批政と云ふ、或は苹果(リンゴ)貝殼蟲の樣な害蟲の傳搬をさせた源であつたかと思はれるゲルトナーの農場ですら葡萄や洋梨の普及等には役立ちあれを續けさせたらばと云ふ人もある位である。商人等も農民を搾取し利益を壟斷したと云ふても北海道農產物の販路を發見擴大した功績を認めてもよい。唯時々値段を釣上げて農民を誘ひ他の時には之を落して蹈付けたと云ふが、農民が之に應じたのが惡いとも云へやう。釣上が必ずしも個々少數者の人爲的に出來るものでもないのである。此の意味に於て北海道農民が投機的であることは進步的とも見得る半面非進步的でもあるわけだ。北聯や酪聯が出來て農民の困難を完全に克服したとも云へない。低價時代にはやはりそれよりは仕方がなかつた。唯借金の故に土地を取上げる樣のことが少くなつた功績は認めやう（勿論之だけでも大したものではある）。又水田開發事業の如きも今日上川及空知兩支廳管內並びに其他合計で各百萬石以上、合計三百餘萬石を出し得る樣になつた反面には邊境及不良土性地方では不成績な地方も出たことは同樣に解釋される。渡邊氏の「北海道土功組合の負債問題」は此點に於て甚しく悲觀的意見を持つて居る。靜態的には救はれない、動態即ち技術の改善、價格の變動では救はるゝかも知れぬとする（それでどうするかは論ぜられては居ない）。

歷史的に見る時如何なる施設でも辯護の途はいくらでもある。假令それが一應惡いことであつても、社會は何とか自力で是正するであらうから、せい〳〵費用がかゝり過ぎたとか風儀を惡くしたとか云ふ樣なことを相對的に批判し得るに止まるではあるまいか。斯くして社會は試驗(エキスペリメント)を受入れ得るが、其の影響は永引かざるを得ない。斯かる試驗を不要にする爲めの論究（即ち思想試驗(ゲダンケンプロビーフング)）が必要であつてそれが了つてから計劃實行されねばならぬ。始めから試驗のつもりでやられ、而も其の結果が辯護され遂に曲りなりに社會が受入れたのでは何の爲めにやつたかわからぬ。社會は多數人の集合なのだから綜合された意志以外の感情や行動ででつち上げられたものになつて行く。實際北海道では計劃的に仕事されたものが多い。農事其他の試驗、土地區劃處分、拓殖醫、拓殖產婆等の醫療機關簡易教育所より大學までの教育機關、植民軌道より拓

殖鐵道迄よく計劃され實行されて居る。唯恐く計劃が其の限度を知らず他との關係的考慮なしのプログラムの羅列、一方的遂行である爲めに誤つた點が多いであらう。前田氏の「農産物增收に伴ふ經濟更生計劃」も其の意味の注意を用ひてある。「計劃事項の徒らなる羅列—それは多くの他の町村の計劃を模倣し無批判に採用した場合が多い—を排除し村の特徴を生かし更生の重心を把握しそれを中心とした計劃とし、內容は目標と實行の大綱を定め、具體的實施方法の如きは年々之を定め動きつゝある狀勢に適應して行くことにしなければならぬ」と主張して居る。

斯かる意味に於て工藤元氏の「北海道に於ける農業保險の諸問題」と東隆氏の「北海道の農事小組合問題運動」の二編が北海道の實情を闡明し、建設的な見解を披瀝した意味に於て尊重さるべきである。唯工藤君の場合計算の根據を示してもらひたかつたし、東君の場合散居獨立農家の組合が府縣の樣な密居倚存農家の組合の性質差を闡明してもらひたかつた。

要之、本特輯は北海道農業特に其の發展經過に關する梢々硬い紹介であるが嚴正なる批判が少く將來に關する展望並びに政策の具體案を缺いて居る點に於て未だ甘いものであると云はれても仕方がないであらう。

（昭和十四年十二月）

澤田德三君の「米消費地の研究と米品種論」

渡邊侃

此著者は大正八年北大農經學科卒業の農學士で、幼から神童とも云ふべき男だつたが、其機敏さを米相場に打込み、遂に失敗してしまつたのを、拾はれて大阪堂島米穀取引所の調査役となり、市場實米の研究では第一人者となつたのを買はれ、最近大日本米穀株式會社調査課長になつた人である。

斯く世情に通じた著者が其經驗を（中には彼の師「白髭やた老師」の意見もある）人に讀ませる樣に書いて邦國に奉仕する志を果さんとしたのが標題の書である之を所謂學問的に書いたならば學位論文にもなるであらう。併しそれは著者の目的ではなかつたと思ふ。

以下本書の結論する所を述べて紹介に代へる。

第一に本邦に於ける米穀消費の地方的特性の代表的なものとして「東京は小ツブを好み大阪は大ツブを好む」「小ツブのシャープな米は腹にもたれる」「大ツブは炊きぶえ」がしフンワリして腹にもたれぬ、「上